

謡い方のポイント（第十七回白謡会研究会）

安達原

観世流では、前シテを鬼女の化身として視るのではなく、人里離れた、荒れ果てた地に庵を結んで、独り寂しく住んでいる女性（老婆ではなく初老の女性）を想定している。この女性は、生きていること自体が侘びしく、眠っている間だけが安らぎだと述懐しているくらいだから、最初のサシ謡いから暗い謡いで始まる。

しかし、夜も更けて寒くなってきたので、焚火をして客僧をもてなそうと、裏山に木の枝を集めに行くほどだから、人恋しく、優しくもある。

ロングで、ようやく心の平穩を見つけたかに見えたが、「長き命のつれなさを……」のところで、再び、いま置かれている境遇に思いが戻ってしまい号泣する。そこに凄さとか不気味さは全くない。

だが、このままのトーンで進んでいったのでは、後場との隔たりが大き過ぎてしまう。場面転換のきっかけとも言えるのが、「や」であり、駄目押しの「な」である。だから、この「や」と「な」は普通の「や」と「な」ではない。謡いの技巧としては、「や」を大きく上から下げてきて、最後に僅かに浮かせること。また、「な」は静に下に押し込むように謡う。

後シテの謡いは、強いことは強いが、信頼を裏切られたことに対する、怒りが込められているから、単に荒々しいだけではだめで、悲痛さが籠っていないといけない。

ワキは山伏。ワキの中で最も剛毅な謡を心がけたい。詞は下の句の二字目を強く張って欲しい。

地謡については、一つだけ挙げておきます。謡の中に一カ所、ほとんどの素人が正確に謡えない、謂わば、難易度ワースト5に確実に入る処がある。即ち、十丁裏三行の「明王」である。ここでは、「みょオ、オ、オ、オ、オ、の」と「オ」を5回発音して下さい。

實盛

頼政、朝長と並ぶ三修羅の一つ。これと云って技術的に飛びぬけて、難しいところはないように思われるが、私にとって、謡いながら最も緊張を強いられるのはこの曲である。

シテは位取りが難しい。特に、「語」からカカル謡にかけての長丁場は、謡い甲斐もある半面、いくら工夫しても尽くし切れない、奥深さがあるように思われる。

自分は、実盛の年齢を超えている筈であるが、シテの貫録を謡いで表現しきれない、もどかしさをいつも感じている。やはり、死生観の備わった、覚悟の出来ている老武者と、豊かな現代にぬくぬくと生きている、自分との人間の大きさの違いなのであろうと思う。勁さの中に、命をかけた悲壮感を、滲ませなくてはならないのであろうが、ともすると、単に強がってしまいがちである。声量はむしろ抑えめに、しかし力を込めて謡いたいものである。

ワキも重要な役割を担っている。通常、修羅もののワキは淀みなく、けれんみなく謡うものと思うが、この曲のワキは、シテが老体であるだけに、しみじみ感が必要かと思われる。

余談になるが、ワキの冒頭の3行の謡いには、いつも心にじんと来るものがある。世阿弥の哲学なのであろうが、自分の人生観に通ずるからかもしれない。

地謡も容易ではない。シテを引き立てるのが地謡であるが、シテの個性はまちまちであるので、臨機応変の謡いも必要かと思われる。地頭の力量が問われる曲である。

櫻川

シテの謡の、最初のチェックポイントは、文を読んでいる途中で狂女に変わっていく表現力。我が子を探す、狂女の曲はいくつかあるが、この曲は隅田川とは対照的で、切なさよりも華やかさが表に出る。前シテはもの静かであるが、後シテは深刻ぶらないで、どちらかという軽やかに且つ、引き立てて（音は高めプラス狂女としての剛さ）を前面に出して謡うべきではないか。終わりの、ロンギはまさに歓喜の歌であることをお忘れなく。

地謡がとても素晴らしい。特にクリ以降はシテの方が、地謡の引き立て役ではないかと思えるくらい、高揚して謡える名調子である。楽しんで下さい。地頭は、総じてリズム感を失わず、決してもたもとと謡わないで頂きたい。

隅田川

一言で言えば、能のなかでのベスト・ドラマと言ってよいでしょう。これほど突き放したような無常観は、隅田川を措いてほかにありません。現在物だからでもありましょうが、典型的な能にみられる、ある意味では上品な、そこはかとない無常観の表現と異なり、持って回らない、とても生々しい展開ですし、また、写実的な要素も多く、シェークスピアの戯曲のようです。

このことを認識した上で、さて、どのように謡うかですが、私は、曲趣に素直に従って、生々しく謡うべきだと考えています。役処も地謡も取り澄ますことなく、感情に任せて率直に歌い上げることが要諦ではないかと思えます。

シテについて言えば、「百万」と同様に最初からの狂女で、我が子が亡くなっていることを知らないのですから、誰はばかりことなく奔放に謡って下さい。

ワキは、小舟の船頭だからといって、軽んじてはなりません。極めて重く、威厳があります。当時は、国境線でもあって、川の交通を司る船頭には、警察権のようなものも与えられていたことでしょう。

ワキの一番の謡いどころ、聞かせどころは言うまでもなく「語」です。2枚強におよぶ長丁場ですから、聞き手が退屈してしまつては、全曲がぶち壊しになります。能としての節度を維持しつつ、高低、強弱、緩急の三次元方程式を解きながらの、全神経を集中しての語りでなければならぬはずですよ。

子方は、わずかふた鎖の出番でしかありませんが、これがまた大変な役です。声の通る人でないと務まりません。地謡との合吟の部分は、通常の場合と異なり、地謡に音階もテンポも合わせることなく、付かず離れず、勝手に、しかし可憐に、明らかに地謡とは別人が謡っている様に聞こえなくてはなりません。独吟の個所も1オクターブは高く。

ワキツレは、明るく、爽やかに、淀みなく謡うのが良いでしょう。通常ワキの位で謡います。

余談ですが、本曲と同じく、世阿弥の長男の元雅の作とされている「歌占」にも、似たような詞章があります。しかし、本曲のシテの心情は、この問答で急転直下暗転するのに対して、歌占では明るくなっていくという対照的な違いがあり、従って詞章は同様であっても、謡い方が全く異なります。

熊坂

声の質感は、生まれながらのもので殆ど変えようがありませんが、この曲は声量が豊かで且つ質感のある声の持ち主に向いているように思います。

熊坂が死んだのは六十三歳とか。大盗賊の首領ですし、しかも能ですから、盗賊というよりは老武者のつもりで。最後の「この松が……」は悲痛の叫びとして謡うべし。

地謡が大変です。余程力量のある地頭でないと務まりません。

以上